

総合大学に芸術を

原田 康夫*
広島大学長

University Policy towards the Arts

Yasuo Harada**
President of Hiroshima University

Abstract I have been asked many times why I chose to become a medical doctor when my dream was to become an opera singer. Just after graduating medical school I began singing lead roles in professional operas. This experience made me think I wanted to change professions and go on to study opera at an art school. After finishing graduate school in medicine I had an opportunity to study the physiology of the inner ear at Pavia University, Italy, while in Italy I took lessons for opera at the Milano Music School. After returning to Japan I decided to continue studying music. I sang in operas at Hiroshima and I began teaching phonetics and vocal theory at Elizabethan Music College and Faculty of Music at Shimane University.

Simultaneously I became known for my research on the inner ear using the new electron microscope. After I became a professor in the department of otolaryngology, I was recognized by universities around the world for my research and because I was known as the "Opera-Doctor". I continued to be active both as a medical researcher and as an opera singer. My broad perspective is based on these experiences.

Science and art have developed separately in Europe and in Japan. In general, art and music schools are separate from the university. Academics in the university can be better developed by reinforcing one another rather than existing in isolation from one another. From this vantage point general education is important and art appears essential in the university. Studying art improves reading, listening and seeing by forming well trained eyes and ears. To learn how to express oneself artistically is to get a sense of the higher quality of one's existence in the world. Many universities in the United States have faculty for fine arts. In the university students can learn about painting, sculpture, music and dance. These courses cultivate originality and creativity which support science. It's likely that in the 21st century art will again be an essential piece of science and academics in general. Therefore, it's important that Japanese universities include a faculty for fine arts. Art will also help to provide a community to the citizens with the university.

総合大学における芸術の役割を私の体験もまじえて論ずるので、私にとっての芸術である音楽との関わりから述べる。

1. 私と音楽の出会い

私は子供の頃から音楽が好きであった。とりわけ、

終戦の年、闇市で手に入れた二枚のレコードは、その後の人生を変える程の影響力をもつことになる。結局、うちこむことになったオペラとヴァイオリンとが、大きく人生にプラスとなり、私の生き方を豊かにしてくれたのである。私は耳鼻科医であるが、医学部を卒業して医局に入る時、この耳鼻咽喉科を選んだのは、自分の好きな音楽と関係があったからである。

*) 連絡先 : 739 東広島市鏡山1丁目 3番2号 広島大学

**) Correspondence: Hiroshima University, Higashihiroshima 739, JAPAN

すでに医学部生,耳鼻咽喉科の大学院生のときから,歌劇「カラヴェリア・ルスチカーナ」の主役トウリッドを演じたり(昭和32年),広島NHKホールの柿落としには「椿姫」の主役アルフレッドを演じる(昭和36年1月15日)など,プロの歌手にまじってオペラ活動を行っていた。大学院を終え,機会あって果たしたイタリア・パヴィア大学への留学も,そのねらいは,実のところミラノの音楽学校でオペラを学ぶことにあった。日本を発ったのは昭和40年4月。まだ外貨の持ち出しがわずか200ドルに制限されていたなかでの留学で,1ドル360円の時代である。いずれにしても,私はこうしてオペラと医学という“二足の草鞋”を履くことになった。

2. 医学解剖学的芸術論 感覚の受容器はまた芸術の受容器でもある

ここで,やや専門的になるが,人間の芸術感覚について医学的見地から見ておきたい。外界からの情報は感覚器への伝言であり,大脳新旧皮質に達して認識される。快・不快・美・醜・苦痛を感知する情緒の中樞は生命自律神経系の隣りに存在するがゆえに,これらは感情により強く左右されている。そしてこれら感覚器の構造解明は,近年,電子顕微鏡の発達により著しく進展しつつあるが,私自身はこれまで一貫して,これら感覚器のうち,聴覚,嗅覚,味覚,視覚,更に平衡覚の受容器に関する微細構造の追求を行ってきた。

その成果に立てば,まず第一に,これら受容器の構造のうち最も複雑で美しいものは聴覚器のコルチ器である。一個一個の細胞の表面に数十本から百数十本の繊毛が階段状に配列しており,これが高音から低音までの音の分析をし,これを脳に伝えるのであるから不思議である。しかも形態学的にも美しい立体構造をもつコルチ器は,造形美のすばらしさゆえに,それ自体芸術作品であると言ってもよい。研究者としては,その構造をより美しく写真にとりこみ,これを展示したいとの意欲にかられる程である。

次に,平衡器の感覚細胞も構造的には有毛細胞であり,コルチ器の有毛細胞と似ているが,発生学的にはよりプリミティブである。

これに対し,嗅上皮の感覚細胞は,細胞のそれぞれが特長的な形態をしている。ただ,言を待つまでもなく,人間の嗅覚が動物のそれよりも劣っており,動物にとっては危険察知のための感覚器でも,人間では

味覚も含め,快・楽・レジャーのためのものと化している。

しかしながら,ここで肝要なのは,人間の芸術的感覚のもととなるのも,実はこれら感覚器を通じての情報なのであって,脳がそれら情報を分析し認識しうるからこそ,その情報を創作,芸術作品にまで変換させることができるのだということである。要するに,感覚の受容器は生存のために必要であると同時に,また芸術の受容器なのである。

さて,感性に関しての特性が個人により大きく異なり,絵のうまい人もいれば,音楽に対して特異な才能を有する人がいることは自明であるが,ではこの芸術的才能とは,いったいどのように人体のしくみと関わっているのか。近年の成果によれば,人間の脳細胞中にあるDNAには芸術に関わる部分が組みこまれており,例えば音楽,造形,絵,画像,文学に関心を持ったり,その他,視覚,聴覚,嗅覚,味覚など感覚に訴えるものを特に好きになるような要素が元来組みこまれているのだという。これが感性であり,それぞれ個人が有する特性である。

とはいえ,折角の感性も磨かなければ光ることはない。感性を磨く機会を与えること,すなわち情報を創作や芸術作品にまで変換させる能力を身につけ醸成させることこそ,教育機関に与えられた重要な任務であり,その最高機関としての大学の一役割だと考える。

3. 中世ヨーロッパにおける芸術と大学

芸術教育の起源と芸術家レオナルド・ダビンチを生ましめた大学 さて,イタリアなどヨーロッパ諸国で,今日多くの芸術的遺産が残されていることは周知のとおりだが,そうしたヨーロッパの絵画・彫刻・建築は,その背景としての宗教的影響の大きさ,特にキリスト教の影響を抜きにして論ずることが出来ない。チマブエ(1240-1302),ジヨットー(1267-1337),マサッチョ(1401-1428),フィリツポ・リッツピ(1406-1469),ポッティチェルリ(1440-1510)等による数々の宗教画がそれであり,フィレンチェで花のドウオーモ寺院(ブルネレスキー設計)を数世紀を要してまで完成させた事実を見ても,キリスト教とそれへの熱烈な宗教心というエネルギーが根底にあってこそその結実と考えざるを得ない。

そして,こうしたルネッサンス期における芸術の開花を可能にさせたもう一つの要因は,貴族たちの

経済的支援による、個人としての芸術家の養成にあった。14世紀までの平板な宗教画が先の画家たちを経て、レオナルド・ダビンチ(1452-1519)の遠近法にまで技法的に高められ、絵画の近代化が始まるのも、そうした支援なくしておそらくあり得なかった。

ただ、今一つ忘れてならないことは、例えばドウオーモ寺院のごとき建造物も、その設計には数学を必要とすることであり、古代パピロニアに発した数学的基礎に学術的発展を与え、普及させたのは他ならぬ大学であったということである。そして私自身、留学して初めて知った史実だが、レオナルド・ダビンチ自体、フィレンツェからミラノに来て、スフォルツァ侯(ミラノ侯)に仕えていた間、パヴィア大学に学んでいるのである。実際、パヴィア大学には彼が作ったという、パヴィア・ミラノ間の運河の水門模型が残されている。

私も留学したパヴィアとは、ミラノの南方36 Kmに位置する人口20万程度の小さな田園都市なのだが、その核と言うべきパヴィア大学は中世の姿を今に伝えている。その、大学としての成立は1361年であり、12世紀に成立し大学の起源とされる「法学のポローニヤ」「神学のパリ」などとは約200年の開きがあるが、母体の古さでは負けてはいない。ポローニヤ、パドワなどイタリアの著名大学の多くがそうであるように、パヴィアもまた法学校を基盤とするのだが、その開校はポローニヤよりも早く、実に9世紀にまで遡るとされる。当時、これら中世の大学には、法学・神学・医学といった学科(あるいは学部)が存在した。

では、いったいレオナルドは、このパヴィアで何を学んだというのか。実は解剖学なのである。レオナルドは生涯に30体の人体解剖を行ったとされるが、その成果の一端は有名な「ウインザー・スケッチ」という解剖図により確認することができる。これは、後に、岩波出版が英国王室よりその一部を借り受け、その影印版(コピー)が100部だけの限定版として出版されているので、日本においてもよく知られている。

ルネッサンス初期に、医学解剖学の領域でも一早く、詳細な図版作成に着手したその功績の大きさは疑うべくもないが、何よりも重要なのはその意図と姿勢であろう。要するに、彼が解剖を行おうとした目的は、単に人物画を描くためだけではなかった。人体の構造に対するより正確な観察という企みのみならず、機能に対しての飽くなき好奇心・探求心がそこに大きく働いていた。加えて、今日、例えば病理学、解

剖学においては、組織観察における方法論として固定法というものがあるが、レオナルドは眼の観察に当たって、眼球を煮沸し水晶体を凝固させて観察したり、神経の観察に際しては、石灰をまぶして筋肉を溶かし、川水にさらすなど、筋肉・脂肪を除去して観察するなど、極めて現代的な方法をすでに約500年前に用いている事実には、実に驚かされる。

ところで芸術と言え、美術などと並び称せられるのは、私も関わっている音楽であるが、これについては当時の大学ですでに教育科目の一つとされていた。法学などの学科が存在したことは既述のとおりだが、そのほかに今日で言う「教養部」あるいは「教養学部」に相当する組織が存在し、何らかの形で教養的な学問「教養諸科」(リベラルアーツ)が教えられていた。時代的変遷・地域差も存在したことは確かだが、その内容は基本的には中世初期の「七教養科」を踏襲するものであり、論理学、数学、天文学などと共に音楽も含まれていたのである。実際、スペインのサラマンカ大学、オックスフォード大学などでは音楽学位も出していたとする史実が残されている。

いずれにしても高等教育における芸術教育の現れは古く中世に遡り、しかもそれが複数の部局を有する大学でなされということである。加えて、レオナルドの例からも、芸術が他領域の学問とむしろ密接な関係をもって捉えられていたことは確かであろう。

ところで、レオナルド・ダビンチはフォルツァ侯に仕える際、リュートの名手という触れ込みで「演会係でも大丈夫」と自選したと伝えられる。ルネッサンス期の巨匠が音楽に通じ、医学の徒でもあったとの事実は私には驚きであった。と同時に、音楽と医学との“二足の草鞋”を履こうとする私にとって、途轍もない励みとなったことは言うまでもない。

4. 近世以後の高等教育における芸術の位置的变化

しかしながら大学では、近世以後、学問や科学と、美術・音楽などの芸術分野とが、互いに別なもの、関係の薄いものとなって来ているように思えてならない。音楽を例に取れば、既述のように中世大学では教養諸科の一つとして存在していたのだが、パリ音楽院が設立された(1795年8月3日:フランス最古の音楽専門学校)ころから、音楽専門の単科学校が出現し始め、しだいに総合大学からの分離を開始する。

大学の歴史の浅い我が国でさえ、芸術教育領域の総合的高等教育機関からの切り離しについては、その例外でなく、明治10年(1877年)の東京大学設立=近代の大学の成立を境に、芸術教育はしだいに専門教育機関による分担へと変化するのである。以下、新制大学成立に至るその概要を、美術と音楽の二分野に分けて見ておきたい。

第一に美術方面から概観すると、まず注目すべきは、(1)東京大学の前身たる開成所ですでに、カリキュラムに科学技術部門諸科の一として「画学」(製図・図学)が導入されていること、しかも東京開成学校に至るまで、美術が建築学と不可分に扱われたという点であろう。(2)両者の教学上の分離が始まるのは、工部美術学校(工部大学校附属:明治9~16年)以後である。加えて、(3)フォンタネージ(画学)、ラゲーザ(彫刻)等イタリア人を「お雇い外国人教師」に開校された工部美術学校が西洋一辺倒であったのに対し、帝国憲法発布(明治22年)と前後して開校された東京美術学校が、当初、日本画(狩野派等)・木彫など日本の伝統美術を軸としていたことも、近代日本における初期美術教育の特徴として極めて興味深い。後者の創設者で南画の素養も有する岡倉天心(東京開成学校を経て、東京大学文学部卒)が、そこで日本美術史・審美学(美学)を教授したことは周知であろう。

なお、美術に比して後発ではあるが、音楽教育も開始された。ただ、音楽の場合、美術と異なるのは、(1)当初から大学のカリキュラムには存在していないということであろう。伊沢修二による「音楽伝習生」制度の発足(明治13年)と東京音楽学校設立(同20年)という形で始まっている。また、(2)「東西二洋ノ音楽」の融合と「国楽ヲ興ス」ことを当初から目指していた点も注目されよう。

いずれにしても、以後、美術・音楽教育は実技教育・師範者養成を含め、これら官立学校を始めとする専門学校を軸に展開されることになる。旧制大学での芸術教育は基本的には美学のみに限定された。以上が、明治の前後から1940年代戦前期に至る、我が国の高等教育機関における芸術教育の概況である。

5. 我が国における芸術系教育の現状 全国の四年制大学を対象とする調査結果を軸に

我が国に一つの転機が訪れるのは、新制大学の誕

生(昭和24年)以後である。要するに、美術・音楽両官立専門学校の合併による東京芸術大学設立=大学への昇格と、新制総合大学の教育系学部における音楽・美術等教育者養成組織の設置がそれであり、これにより初めて芸術教育の機会は名実ともに大学の場合へと拡大されたということである。

では、今日、我が国の高等教育機関では、実際どのように芸術教育が実施されているのか。このたび私どもで、国・公・私立の四年制大学を対象に、芸術系教育組織の分布について大学の種別ごとに調査した結果概要を、ここに紹介しておきたい(別表参照)。なお、ここではかつて美術と密接な関わりを持っていた建築学をも含めていること、学問領域に重なりが存在することを恐れず、便宜上、音楽系、美術教育系、芸術学・美学・美術史学系、演劇・文芸系、視覚芸術系、工業デザイン系、建築学系の7領域に分類する。

- (1) 音楽系：音楽実技教育系と音楽教育学系組織を持つ大学が極めて多い。国立では、東京芸大音楽学部が戦前からの音楽専門家養成機関を前身とする以外は、基本的に戦後、新制の総合系、教育系大学の教育学部に設置された音楽教育学系組織である。大半が小・中学校の教員養成課程内の一組織として存在する。一方、私立大学の場合、多く音楽系単科大学と教養系大学に音楽教育、実技・理論系学科が設置されている。
- (2) 美術教育系：美術・工芸、書道も含め、音楽とほぼ同様のパターンを示している。とくに、小学校の図画工作科、中学校の美術科など教員養成系組織の多さが目立つ。
- (3) 芸術学、美学、美術史系：国立では、旧帝国大学・旧官立大学・東京芸大など一部機関に限られており、かつ学科のなかの一専攻あるいは教育・研究講座として存在している場合が大半である。機関数・独立学科数ともに、私立大学の方が圧倒的である。
- (4) 演劇・文芸系：国・公立大学には該当する教育組織がなく、専ら私立大学にあるが、その数も学科組織では3機関5学科と極めて少ない。
- (5) 視覚芸術系：写真、映像、ビジュアル・デザインに関する学部及び学科は、国立では和歌山大学と九州芸術工科大学にあるのみで、むしろ、私立・公立大学に集中していると言ってよい。ただビジュアル・デザイン系に関しては比較的新しい分野である。

(6) 工業デザイン系: 工業意匠及び環境設計についても, 私立で15機関19組織, 公立が6機関6組織とこれに次いでいるのに対し, 国立では総合系大学で2学科と, 芸術系大学に1学科あるのみである。

(7) 建築学系: 建築学・土木工学系学科は, 国・公・私立共に旧来から工学部に存在し, 主に構造設計の面から建築, 土木が教授されてきたため, 芸術・美術系には極めて少ない。この分野を工学部プロパーの学問として捉える伝統がなお健在のようである。

以上より判明することは, 一つには新領域の学科設置に対しては国立より私立の方が敏感だということであろう。しかしそれ以上に顕著な特徴は, 芸術系教育領域が一般には総合大学と別に単科大学=芸術系大学として機能しているか, あるいは教育学部の一部にとりこまれているということである。事実, 我が国の総合大学を見る限り, 一部私立大学を除いて基本的には芸術学部が存在しない。従って, 新制大学の誕生が我が国の芸術教育の転機であったにもかかわらず, 結局はヨーロッパにおけると同様, 総体として中世ヨーロッパの大学とは似て非なるものと化している, ということになる。

むすびにかえて 芸術系教育の将来的展望を考える

ところで, やや悲観的な見方をするようだが, 21世紀の到来を前に念頭に置いておくべきは, 少子化にともなう教員養成系教育学部の再編成の余波をまず蒙るのが, 今日最も多く認められる芸術系教育組織であろうということである。

まずは音楽分野である。戦後これら組織を整備し

たのには, 国民の荒んだ心を音楽で癒すべく音楽教育にウエイトを置こうとの意図があったと思われるが, 今や情勢は一変し, 音楽分野の教育は大学教育の枠を越えて大きく進出し普及しつつある。戦前には極めて高価であったピアノやその他の楽器にしても, 一般市民にすら比較的手軽に入手しうるコストになっており, この点からも初等・中等学校向けの音楽教授を大学で講ずる必要性はすでに乏しくなったように見える。従って, 芸術大学, 音楽学校などで音楽の専門家のみを養成するだけで十分な時代の到来も, 可能性として少なくないのではないか。

そして, これと同様のことは美術・工芸領域についても言える。専門家の養成も国立大学の学科でよりは, より高度の専門家を養成する美術大学へとシフトする可能性が高い。

むしろ, 今後の飛躍的な発展が見込まれる分野とは, これまで弱小とされたコンピューターを利用したデザイン・映像・設計系等で, あるいはこれらが一躍芸術としての地位を獲得し, 次世紀には工学部の土木建築などと合体し更に広域の学部として発展して来る可能性とて否定できない。また, 教育系・総合系学部に分散している音楽・美術教育系や視覚芸術・美学・演劇などは, 大きな芸術枠の下に統合されて新型芸術学部に衣替えし, 一層の発展を見る可能性もある。

謝辞

この論文を発表する機会を与えてくださった北海道大学の「高等教育に関する120周年記念国際ワークショップ実行委員会」の皆様方に心からお礼を述べる。

